

令和 5 年 6 月 10 日現在

機関番号：17201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K12527

研究課題名（和文）看取りのパンフレットを用いた終末期在宅ケアモデルの開発

研究課題名（英文）A model of end-of-life home care using the pamphlet for families with terminally ill patients at home

研究代表者

熊谷 有記（Kumagai, Yuki）

佐賀大学・医学部・准教授

研究者番号：10382433

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、効果的な看取りのパンフレット使用方法をインタビュー調査も含めて明らかにする予定であったが、COVID-19の感染拡大にてインタビューが困難であった。そのため、全国の訪問看護ステーション管理者を対象とした質問紙調査をもとにモデル開発を行った。最終的に、患者要因・家族要因・組織要因から看取りのパンフレットの有益性を判断し、パンフレットの使用が家族と訪問看護師に肯定的か否定的であるかを評価し、終末期在宅ケアに活かすという循環モデルを作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

看取りのパンフレットの有用性はこれまでの研究で認められているものの、看取りのパンフレットを使用した終末期在宅ケアモデルは開発されていない。さらに、がん患者の家族と非がん患者の家族に対する看取りのパンフレットの使用状況も明らかにされていない。本研究で作成した「看取りのパンフレットを用いた終末期在宅ケアモデル」は、家族と医療従事者に対する肯定的なアウトカムを得るための方略を具体的に示す重要な知見となっている。

研究成果の概要（英文）：In this study, we aimed to clarify the effective use of pamphlets for families with terminally ill patients at home, including evaluation by interview. However, due to the COVID-19 pandemic preventative measures, it was difficult to conduct interviews. Therefore, a model of end-of-life home care using the pamphlet was developed based on a nationwide questionnaire survey of home-visit nursing administrators. This model is cyclical as the utility and efficacy of end-of-life care pamphlets for home care are determined by the patient, family, organizational factors, and whether the outcome of using the pamphlets is positive or negative for the family and home-visit nurses.

研究分野：看護学

キーワード：看取りのパンフレット 在宅ケア 生活の質

1. 研究開始当初の背景

団塊の世代が75歳以上になる2025年問題として、終末期在宅患者の増加が指摘され、在宅療養を希望する患者と家族に対するケアの充実を図ることが求められている。終末期患者と家族の生活の質を高めるために、医療従事者が、死についての準備教育として、死にゆく際の身体の変化やケアの方法を教育することが重要である。とくに、患者と家族が在宅で死を迎えることを希望しても、死にゆく際に生じる身体の変化を理解していないと、その兆候を急変と捉えて救急車を呼び、搬送中や病院で亡くなることも少なくない。このような状況を避けるためには、死にゆく際の身体の変化やケアの方法が記載された看取りのパンフレットが役に立つ。

看取りのパンフレットに関する既存の研究では、国外では救急現場、国内では緩和ケア病棟・一般病棟・在宅における終末期において、パンフレットを使用した医療従事者と遺族を対象に、パンフレットの有用性と課題が検証されている。とくに、終末期を在宅で療養する患者の家族は、医療従事者が側にいない状況下でも、看取りのパンフレットで正しい情報を何度も確認し、不安を軽減することが期待できる。しかし、使用時期や説明の仕方によっては家族に不安をもたらすという課題もある。医療従事者が看取りのパンフレットの有用性を認識していても、使用時期の決定が難しいなどの課題があるために、パンフレットを積極的に使用しない場合も少なくない。このような課題を解決することによって、看取りのパンフレットの活用が期待できる。そこで、看取りのパンフレットの効果的な活用法を明らかにし、看取りのパンフレットを用いた終末期在宅ケアモデルを開発する必要があると考えた。

2. 研究の目的

- (1) 訪問看護師の視点に基づいた看取りのパンフレット使用方法を明らかにする。
- (2) 訪問看護師以外の職種の視点に基づいた看取りのパンフレット使用方法を明らかにする。
- (3) 1)2)の結果を踏まえて、看取りのパンフレットを用いた終末期在宅ケアモデルを開発する。

3. 研究の方法

- (1) 訪問看護師の視点に基づいた看取りのパンフレット使用方法

① 対象者

一般社団法人全国訪問看護事業協会に登録されている全国の訪問看護ステーションにおける各都道府県の訪問看護ステーション数の割合に基づいて、各都道府県から抽出すべき訪問看護ステーション数を割り当てた。そして無作為抽出した2,000か所の管理者に、独自に作成した質問紙を郵送した。回収率が低かったため、197か所に電話での研究協力依頼を行い、返送された質問紙のうちパンフレットを使用経験がある管理者の回答を対象とした。

② 調査内容

質問紙は、訪問看護ステーション概要（設置主体、加算等の届出状況、従事者数、利用者数）と、看取りのパンフレットの使用状況（使用の有無、がん患者家族と非がん患者家族に対するパンフレットの使用経験、渡す際に考慮すること・渡す時期）などから構成した。なお、家族に渡す際に考慮すること（19項目）については、先行研究をもとに決定した。

③ 分析方法

量的データについては記述統計を行い、質的データについては意味の類似性からカテゴリ化した。

④ 倫理的配慮

本研究への協力の有無は対象者の自由意思で選択できること、個人を特定する可能性のある情報は取り扱わないこと、成果公表後にシュレッダーで裁断することなどを訪問看護ステーション管理者に書面で伝え、協力を依頼した。本研究では、質問紙の返送をもって同意が得られたとみなした。本研究は、佐賀大学医学部倫理委員会（承認番号：29-65）の承認を得て実施した。

- (2) 訪問看護師以外の他職種の視点に基づいた看取りのパンフレットの使用方法

看取りのパンフレットを使用している医師やケアマネジャーへのインタビュー調査を予定していたが、COVID-19の影響で実施ができなかった。

- (3) 看取りのパンフレットを用いた終末期在宅ケアモデルの開発

1)の量的データおよび質的データの結果を踏まえて、研究者間で繰り返し話し合い、終末期在宅ケアモデルを開発した。

4. 研究成果

- (1) がん患者と非がん患者の家族に対する看取りのパンフレットの使用方法の相違点と類似点

① 対象の概要

430か所からの回答が得られた（回収率21.5%、有効回答率21.5%）。本研究では、このうち看取りのパンフレット使用経験を有する224か所の回答を分析対象とした（パンフレット使用率52.1%）。設置主体は医療法人64か所（28.6%）と営利法人61か所（27.2%）が多かった。

② パンフレットの使用状況

パンフレット使用頻度は、がん患者の家族（95.1%）が非がん患者の家族（76.8%）よりも高かった。

③ パンフレットを渡す際に考慮すること

使用時に「家族の心配や不安の程度」「家族の在宅死の希望」「患者の在宅死の希望」が、両家族ともに84%以上考慮された（図1）。がん患者の家族と非がん患者の家族において、パンフレット使用時に考慮する点に差がほとんどなかったことから、訪問看護師は疾患にかかわらず、終末期患者の家族に対してdying process やケアの方法を伝えるために看取りのパンフレットを使用していることが考えられる。

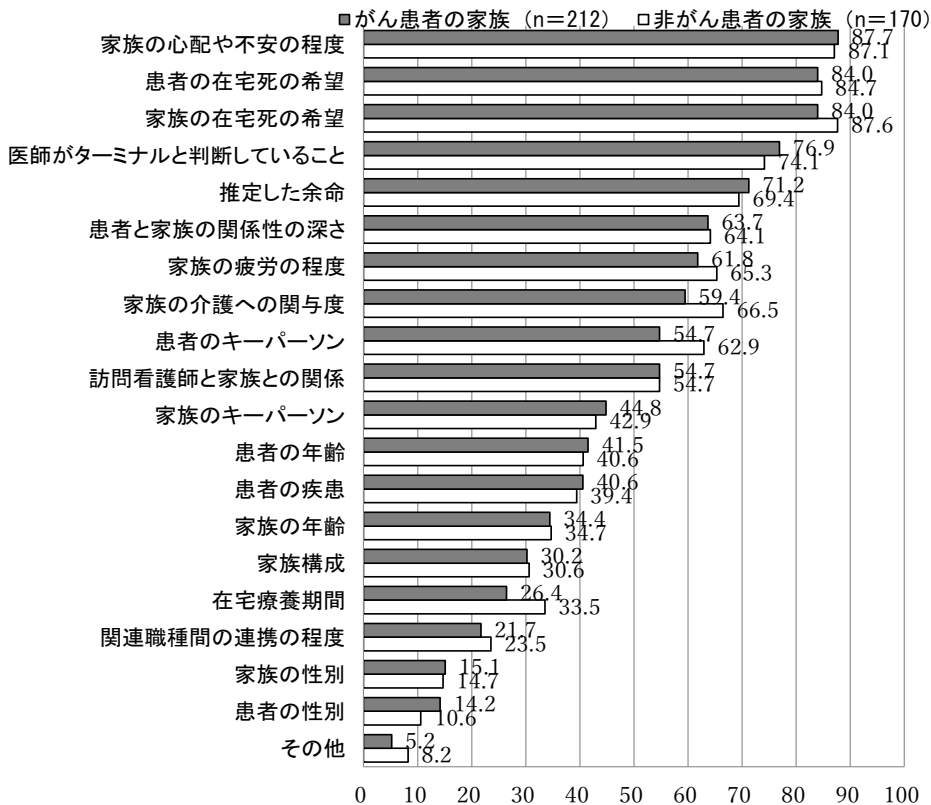


図1. がん患者と非がん患者の家族にパンフレットを渡す際の考慮項目

④ パンフレットを渡す時期

渡す時期では「（最期の）1週間から1か月」が最も多く、その割合は、がん患者の家族で56.8%、非がん患者の家族で63.4%であった（表1）。

表1. がん患者と非がん患者の家族に看取りのパンフレットを渡す時期

	がん患者の家族 n=213 数 (%)	非がん患者の家族 n=172 数 (%)
亡くなる3日以内	1 (0.5)	3 (1.7)
4日から1週間以内	57 (26.8)	28 (16.3)
1週間から1か月	121 (56.8)	109 (63.4)
1か月以上	28 (13.1)	24 (14.0)
無回答	6 (2.8)	8 (4.7)

⑤ パンフレットを渡す時期決定の困難さ

渡す時期の決定に難しさを感じている割合は、がん患者の家族で59.6%、非がん患者の家族で69.7%であった（表2）。

⑥ パンフレットを渡す時期の決定方法

パンフレットを渡す時期の決定方法は4項目とも、がん患者の家族および非がん患者の家族間にほとんど差はみられなかった。決定方法のなかでは、「訪問看護ステーション従事者全体での話し合い」が最も多かった（図2）。その他の決定方法として、主治医に相談・主治医が決定、責任者の判断などが挙げられた。

表2. がん患者と非がん患者の家族に看取りのパンフレットを渡す時期決定の困難さ

	がん患者の家族 n=213 数 (%)	非がん患者の家族 n=172 数 (%)
とても難しい	27 (12.7)	30 (17.4)
少し難しい	100 (46.9)	90 (52.3)
あまり難しくはない	59 (27.7)	39 (22.7)
難しくはない	24 (11.3)	10 (5.8)
無回答	3 (1.4)	3 (1.7)

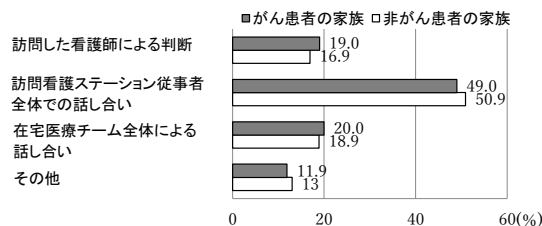


図2. がん患者と非がん患者の家族に看取りのパンフレットを渡す時期の決定方法

(2) 看取りのパンフレットの有用性と使用にあたっての工夫や留意点

① 看取りのパンフレットの有用性

先行研究より、看取りのパンフレットの有用性として、家族にとっては「家族の看取りに対する覚悟につながる」「家族が患者の現状を理解するのに役立つ」「家族が患者に対してできることがわかる」「家族が臨死期に生じる身体上の変化をイメージできる」「他の家族に患者の状況を伝える際に家族が利用できる」「家族の安心につながる」「訪問看護師と家族の関係を深めることができる」の7項目が抽出された。また、訪問看護師にとっては「家族にわかりやすく説明できる」「家族に自信をもって説明できる」の2項目が抽出された。

これらの看取りのパンフレットの有用性全9項目について、8割以上のステーション管理者が認めていた。

9項目以外の有用性として、家族においては「家族が知りたいときに読める」「読み返すことができる」「落ち着いて読むことができる」「患者の変化に対し落ち着いて対応できる」が、訪問看護師においては「スタッフ間で統一したケアができる」「スタッフの不安軽減につながる」「スタッフ教育に有用である」が挙げられた。

② 看取りのパンフレット使用にあたっての工夫や留意点

質問紙の自由記述から、次の工夫や留意点が明らかになった。

- ・ 家族が抱く患者の死という言葉に対する嫌悪感への強さや、文字に慣れているかなどを踏まえて看取りのパンフレットの使用の有無を決定するといった「家族の状況を踏まえて使用する」
- ・ 病気の種類や病気の経過を踏まえて「使用するパンフレットの種類を選択する」
- ・ かかりつけ医との連携は不可欠であるため「医師と連携しながら渡す」
- ・ 渡す際の「環境づくりを大切にする」
- ・ きちんに関わる覚悟を示す「渡す際の看護師の関わる際の姿勢を示す」

(3) 看取りのパンフレットを用いた終末期在宅ケアモデル (図3)

看取りのパンフレットを使用するにあたって、訪問看護師は患者要因、家族要因、および在宅医療チーム間の連携などの組織要因から、看取りのパンフレットを使用することが家族にとって有益か有害かを評価する。有益である場合、パンフレットの使用が家族と訪問看護師に肯定的か否定的であるかを評価し、終末期在宅ケアに活かすという循環モデルを作成した。質問紙調査の自由記述に、パンフレットの内容を繰り返し説明したり、グリーフケア時にパンフレットに対する家族の意見を聞いているとの意見が挙げられたことから、パンフレット使用結果の評価は、渡した時点、渡した以降の訪問時、およびグリーフケア時に行うことが望ましいと考える。

渡すタイミングの難しさや、実際の説明の仕方などが看取りのパンフレット使用の困難要因であるという回答もあったため、組織要因の一つとして方略の検討を行う予定である。

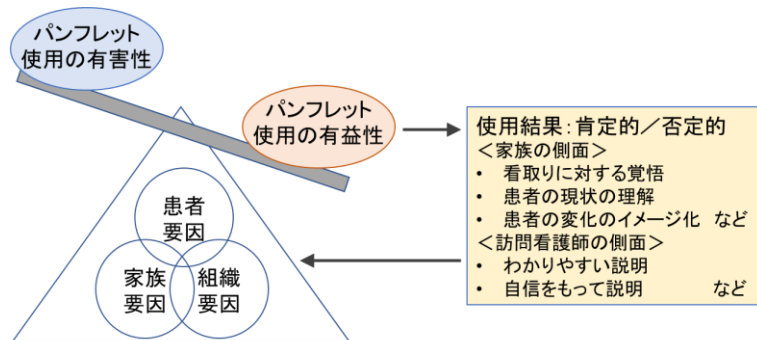


図3. 看取りのパンフレットを用いた終末期在宅ケアモデル

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 熊谷有記、田淵康子、室屋和子	4. 巻 16
2. 論文標題 終末期在宅療養を支える看取りのパンフレット使用の実態 がん患者の家族と非がん患者の家族について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Palliative Care Research	6. 最初と最後の頁 139-145
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Kumagai Yuki, Tabuchi Yasuko, Muroya Kazuko
2. 発表標題 Current status of educational pamphlets for families of terminally ill patients at home
3. 学会等名 The 6th International Nursing Research Conference of world academy of nursing science（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Kumagai Y, Tabuchi Y, Muroya K
2. 発表標題 Utilization rate of and important considerations related to pamphlets for families of terminally ill patients at home
3. 学会等名 22nd East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS) 2019（国際学会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	室屋 和子 (Muroya Kazuko) (50299640)	佐賀大学・医学部・准教授 (17201)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	田淵 康子 (Yasuko Tabuchi) (90382431)	佐賀大学・医学部・教授 (17201)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関